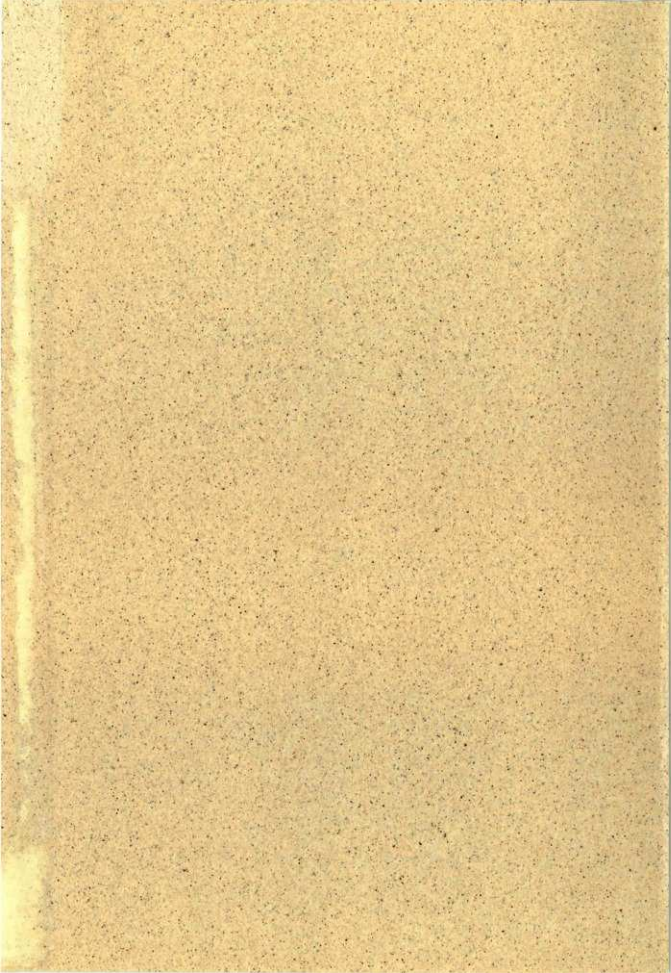


AKI ZUKA
秋 塚 古 墳 群 II

平成3年度土地改良総合整備事業秋塚
地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

沼田市教育委員会



序

関東から北陸へ日本列島を横断する関越自動車道がもたらした高速化の波は、周辺地の各種開発事業へ少なからず影響を与え、沼田市も大きく変貌しつつあります。それに伴い、私たちの祖先が各地域に遺した文化財も急速に失われつつあり、その保護と活用が今日の重要な課題となっています。

この発掘調査は、前年度に続き秋塚地区の土地改良工事により消滅する古墳を記録保存するための事前調査でありました。2ヶ年にわたる調査で、一部を除き、秋塚古墳群内の主要な古墳については、ほぼ解明できるだけの貴重な資料を得ることができました。この成果が地域の歴史学習の一助として広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査実施にあたり終始ご指導、ご協力いただきました関係者の皆様に心から厚く感謝の意を表します。

平成4年3月

沼田市教育委員会

教育長 萩 野 明 正

例 言

1. 本報告書は、平成3年度土地改良総合整備事業秋塚地区に伴う秋塚古墳群の発掘調査報告書である。
2. 調査古墳は、群馬県沼田市秋塚町字前原467番地外に所在する。
3. 発掘調査は、平成3年5月7日～7月23日まで実施し、その後平成4年3月まで整理作業を行った。
4. 発掘調査とそれに伴う整理作業については、沼田市教育委員会が、国・県補助事業及び沼田市経済部農地整備課の費用負担による事業として実施した。
5. 調査体制は以下の通りである。

教 育 長	荻野明正	文化財保護係長	鳥羽昭男
教 育 次 長	松井誠二	社会教育主事	小池雅典 (担当)
社会教育課長	角田巻由	主 事	宮下昌文 (担当)

6. 本書の執筆、編集及び遺構・遺物の写真撮影は小池が行った。
7. 出土遺物、その他の記録資料は、沼田市文化財調査事務所で保管している。
8. 発掘調査及び本書の作成にあたり、次の方々からご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。(敬称略)

秋塚土地改良組合、群馬県教育委員会文化財保護課、群馬県埋蔵文化財調査事業団、沼田市経済部農地整備課、梅沢重昭、清水守雄

凡 例

1. 第1図は、国土地理院発行の2万5千分の1の地形図「沼田」「後閑」を使用した。
2. 第2図は、沼田市発行の2千5百分の1の「都市計画図No3」外を使用した。
3. 図中の方位は磁北を表す。
4. 図中に記載した断面基準線の数字は、海拔高である。
5. 遺構図・遺物図は、原則としてそれぞれ以下のように統一したが、遺物で縮尺が異なる場合は表示した。
古墳実測図1/100 石室実測図1/50 直刀1/4 鉄銚・土器1/3 耳環・帯金具・玉類1/2
6. 石室の左右は、入口から奥壁へ向っての方向を基準とした。
7. 古墳の番号は、第1年次調査の古墳と重複を避けるため、通し番号とした。

目 次

序

例 言

凡 例

I 調査に至る経緯と遺跡の環境	2
1 調査に至る経緯	2
2 遺跡の位置と地理的環境	2
3 歴史的環境	2
II 調査の方法と遺跡の概要	5
1 調査の方法	5
2 遺跡の概要	5
III 検出された遺構と遺物	6
10号古墳	6
11号古墳	9
12号古墳	16
13号古墳	20
他の時代の遺物	22
IV まとめ	22

写 真 図 版

I 調査に至る経緯と遺跡の環境

1 調査に至る経緯

土地改良総合整備事業秋塚地区内には、すでに大半は消滅したとされていたが、秋塚古墳群の存在が確認されており、その取扱いが問題となっていた。教育委員会は、文化財保護の立場から農地整備課と協議を重ねた結果、人家裏に存在する保存良好な古墳（上毛古墳群池田村第5号墳）を除き現状保存できないとの結論に達し、発掘調査を実施して記録保存することとなった。

2 遺跡の位置と地理的環境

秋塚古墳群は、沼田市の中部東端に所在する。この地は、薄根川中流域右岸に沿って点在する。幅の狭い段丘面の一つで、西側は丘陵が迫っている。古墳群は、標高450m～480mに占地しているが、市道の東側、450m～460mにおいて分布が農密である。川からの距離は東端で約60m、比高差は約18mを測る。地理的には、対岸の川場村生品地区と同一圏内に属する。

3 歴史的環境

秋塚古墳群(1)の成立した過去からの歴史的背景及びその経過について、周辺地域の主な遺跡を挙げて概観してみたい。

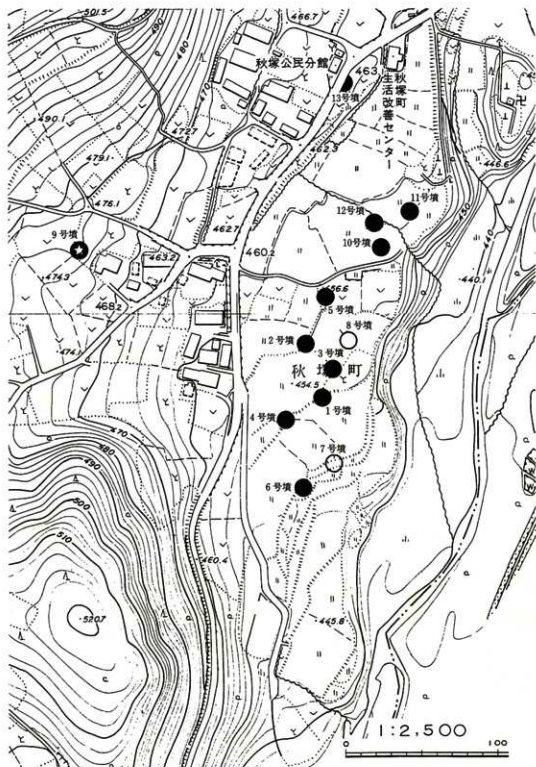
周辺地域においては、縄文時代になるといくつかの遺跡が確認されるようになる。発掘調査で、前期の竪穴住居跡が川場村橋詰遺跡(3)・奈良原遺跡(6)で検出されているが、中期の資料も分布調査で他の遺跡で確認されている。

弥生時代には、後期になってから多くの遺跡が認められるようになり、前述した橋詰遺跡、奈良原遺跡の他に、鎌倉遺跡(1)・高野原遺跡(5)・奈良田向遺跡(7)で竪穴住居跡が発掘調査され、壺、甕等多くの資料が検出されている。

古墳時代になると前期の竪穴住居跡が、清水遺跡(9)・高野原遺跡で調査されている。後期になると高野原遺跡から6世紀中葉に築造された小円墳が確認されている。7世紀に入ると薄根川中流域には本古墳群をはじめ天神古墳群(2)・生品古墳群(4)・奈良古墳群・峰山古墳群(10)・愛宕山古墳群(11)が存在するが、いずれの古墳も横穴式石室を埋葬主体部とする小円墳であろう。

奈良時代の遺跡は、現在周辺地では確認されていないが、平安時代になると竪穴住居跡が奈良田向遺跡・奈良原遺跡から検出されている。

中世の発掘調査例は少なく、奈良原遺跡から館跡に伴うと想定される堀跡、五輪塔が知られているに過ぎない。



第2図 古墳分布と周辺の地形

II 調査の方法と遺跡の概要

1 調査の方法

前年度の発掘調査により、古墳の構造・遺存状況がある程度予測できたため、水田の石垣等の不自然な部分についても確認を行った。確認調査により古墳と認定されたものについては、石室主軸方向とそれに直交する方向にセクションベルトを設定し、表土及び覆土を掘り下げ、必要に応じトレンチを設定して石室・墳丘等の調査を実施した。

なお、水田の耕土、堀の覆土上部の掘削については、重機を使用した。

図面は、墳丘実測図については1/50～1/20、石室実測図については1/20と1/10を適宜選択して作図し、調査の進捗状況に合わせて写真撮影を行った。

2 遺跡の概要

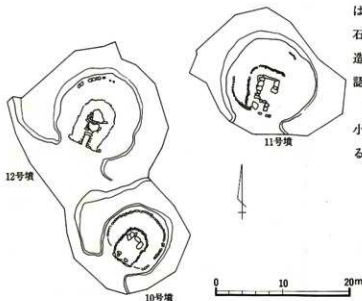
今年度の調査区域は、昨年調査区域の北側にあたり、古墳3基と古墳痕跡1ヶ所を発掘調査した。これらの古墳はすべて上毛古墳綜覧には記載がない。古墳群内で綜覧に記載されているのは、現状保存することとなった池田村第1号墳と昨年調査した2号墳（池田村第5号墳）の2基のみである。

2ヶ年で発掘調査を実施した古墳は、石室まで調査できたもの9基、すでに消滅しその痕跡の確認のみにとどまったものが3基である。

本古墳群内の古墳は、直径10m前後の円墳で埋葬主体部は全て横穴式石室である。また、古墳

はいずれも榛名山から噴出した軽石の降下（6世紀中頃）以降に築造されており、埴輪列等の設置は認められなかった。

当古墳群は10数基で構成された小規模な群集墳の様相を呈している。



第3図 10, 11, 12号墳位置関係図

III 検出された遺構と遺物

10号墳

a) 位置

第2次調査区の南端に位置する。約10m北に12号墳が、約21m北東に11号墳が存在する。

b) 墳丘及び外部施設

すでに大半が破壊され、水田の畔に壁石の一部が露出している状況であったが、耕土を剥いだところ墳丘根石は比較的良好に残存していた。トレンチの所見から墳丘は、Hr-I(榛名-伊香保テフラ層)のFP(二ツ岳降下軽石堆積物)層上に構築されていることが確認された。規模は石室主軸方向で直径8mを測り、墳丘根石の配列状況から円墳であることが判明した。根石はFP層上に平積みを基調として、据えられ長径40cm大の河原石が多用されている。

周堀は全掘できなかったが、石室入口側がとぎれた畝状に古墳を圍繞している。最大幅は全掘した西側で5.3m、深さは0.45mを測る。墳丘根石の外縁から周堀の中央底面にかけては、多量の河原石が検出されていたことから根石の上には、数段以上葺石が存在していたことが窺える。墳丘根石から周堀にかけての40~60cmは、FP層が残存しており、テラス状の平坦面であったことが確認された。

c) 主体部

天井石はすでに1石も存在せず、壁石についても奥壁の1石とそれに続く側壁の一部が残存していた程度であったが、礎石や裏込の範囲はほぼ明確に検出できた。

石室は全長385cmを測る自然石乱石積横穴式石室でS-44°Wに開口する。石室の袖の有無については、壁石の残存度が極めて悪いため、明確にはし得なかった。残存する玄室壁石は、奥壁については横積みとし、右壁は横積み、左壁は平積みとしている。

羨道部については、やや小振りの割石が、右側に1石、左側に2石が小口積みで現存する。

床面は、奥壁側から150cmまでは攪乱されておらず玉砂利が存在し、その下には石室全般にわたって偏平な礎石が敷設されている。羨道部は、入口と玄室側に河原石を小口積に積んだ閉塞石が両者とも2石ずつ現存した。

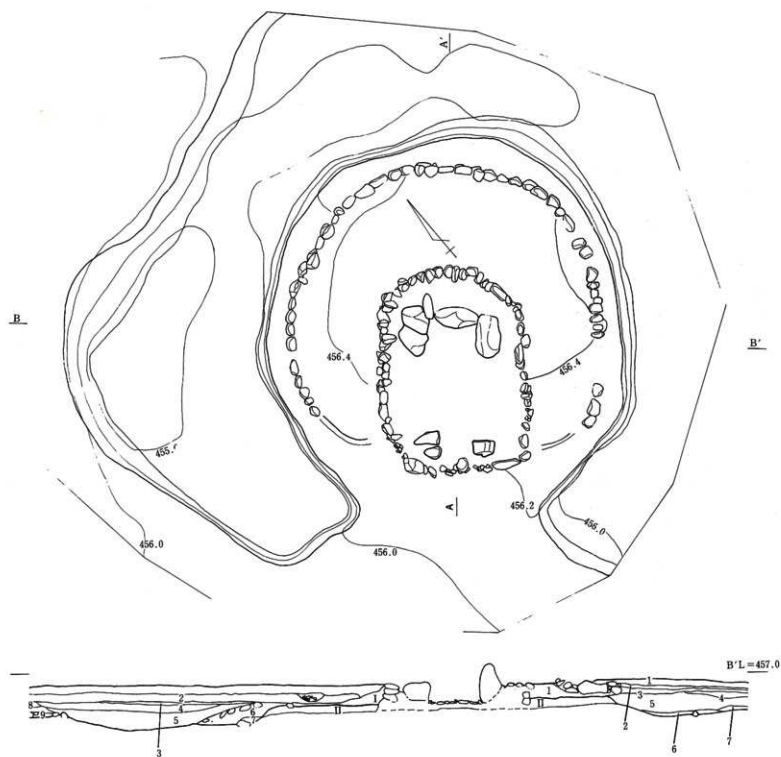
裏込の範囲は、石室の形に合わせてこれを包み込むように主軸方向で5.4m、短軸方向で3.9mを測る。

外縁は根石をFP層上にあるいはFP層中に据え、残存状況の比較的良好な、奥壁側では河原石を小口状に積み上げ壁石との間には、小礫を充填していた。

掘り方については明確にし得なかったが、トレンチセクションの状況から判断して、壁石根石を設置する部分のFP層を掘り込んでいた程度のものであったと判断された。

d) 遺物

床面上面の破壊をまぬがれていた玄室奥壁側に直刀及び刀子が検出された。1の直刀は右壁寄

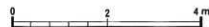


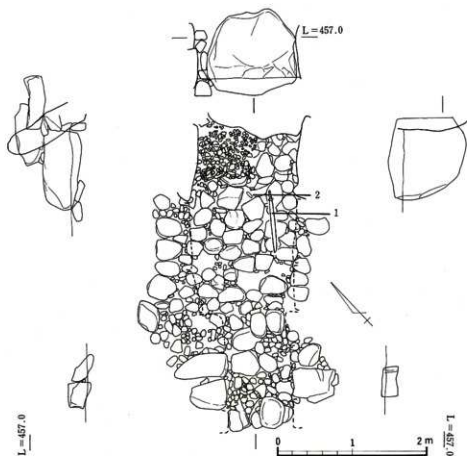
第4図 10号墳実測図



1. 表土 灰褐色土。
2. 赤褐色土 酸化土。
3. 暗褐色土 FP 多く含む。
4. 灰褐色土 砂質、浅間山軽石。
5. 黒褐色土 FP 多量に含む、円礫含む。
6. 暗褐色土 FP・円礫多く含む。
7. 暗褐色土 FP 非常に多く含む。
8. 暗褐色土 FP 多くやや砂質。
9. 黒褐色土 FP 多量に含む。

- I 灰褐色土 FP が主体
 I' " FP を多量に含む。
 II FP 層
 III 黒褐色土 円礫多く含む。





第5図 10号墳石室実測図

りで切先を羨道側に向けた状況であった。全長83cm、刀身幅3.1cmで両関平棟造で倒卵形の鍔と鍔が着装され、茎には2本の目釘が残存している。2の刀子は現存長9.6cm、幅1.6cmで茎を欠損する。

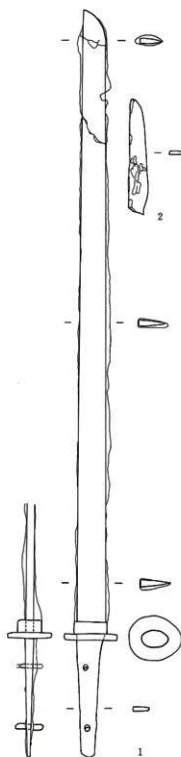
11号墳

a) 位置

第2次調査区東端の段丘先端に近い位置である。約15m西に12号墳が、約21m南西に10号古墳が存在する。

b) 墳丘及び外部施設

すでに墳丘は平夷され、壁石がむき出しの状態で天井石や壁石の多くも崩落したり抜き取られていた。表土を剥いだところ東側の大半は水田構築時に削平され、墳丘根石も残存していなかったが南西側と北東側の一部については墳丘根石が検出され直径10.6mの円墳であることが判明した。トレンチの所見から墳丘はFP層上に構築されており、墳丘根石は長径30cm大の河原石が平積み状に据えられていた。周堀は全掘できなかったが羨道側を袂状に残し、古墳を圍繞してい



第6図 10号墳出土遺物

る。西側トレンチで規模の確認を行ったが、12号墳の周堀と重複しているため幅は明確にし得なかった。深さは約0.7mを測る。周堀の中からは多量の河原石が検出されており、10号墳と同様数段以上の葺石が存在していたことが窺える。また墳丘根石から周堀の掘込みまでは西側で100cmを測り、テラス面の存在が確認された。

c) 主体部

天井石は1石現存していたが、すでに玄室内に崩落し、壁石の一部もすでに根石まで抜き取られ、東側については表込めも残存していなかった。石室は全長532cmを測る自然石乱石横穴式石室でS-21°-Wに開口する。左袖は確認されたが右袖については壁石が抜き取られていたためその存在は不確定である。天井石は200cm×124cmを測る。玄室壁石は、奥壁については2石検出されたが2段目については、外側に崩落していた。1段目は偏平で板状の大石が立てられていた。側石は右壁側で原位置に1段3石、左壁側で2段8石現存していた。主に大石が選択され面を整えて1段目は横積み、2段目は小口積みを基調としている。

羨道側石は右側で2石、左側で3石検出されたが入口部分の石は両側とも抜き取られていた。石の据え方は小口積、横積である。玄内床面は玉砂利が敷設されていたが、やや乱れており、下面にやや大振りの石が選択されていた。羨道部は入口と玄室側に河原石を積み、閉塞し、中にそれより小振りの石を充填していた。

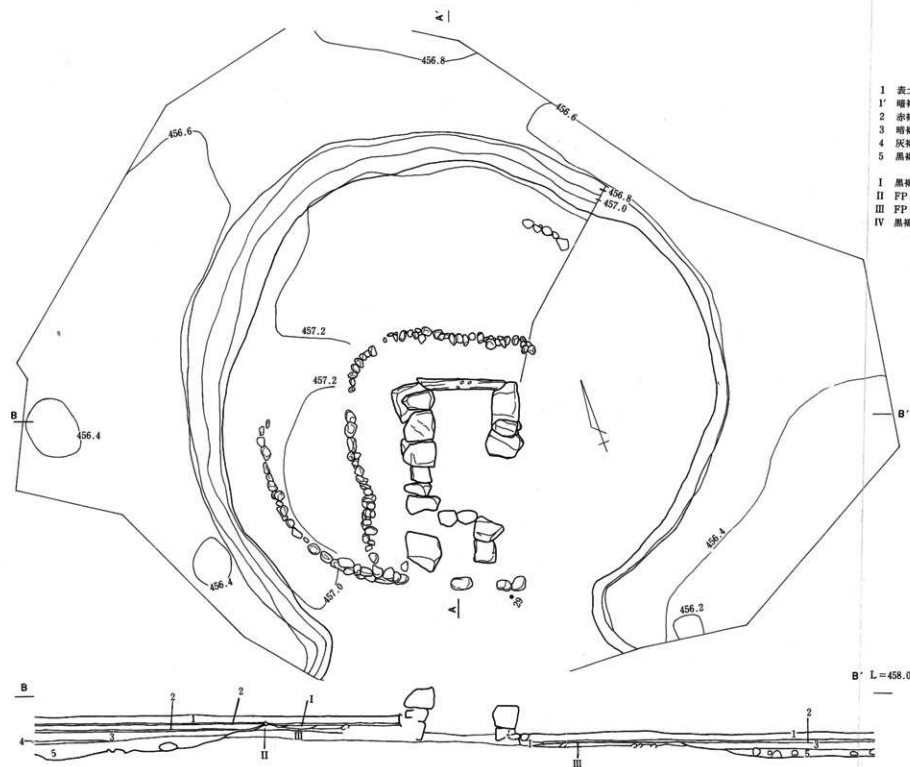
玄室側の閉塞石は、羨道端部に設置されず、入口側に寄った位置に積まれている。

裏込の範囲は石室に合わせ包み込む形状で外縁には河原石を小口、あるいは横積としてかため、内側には小礫を充填していた。

掘り方についてはトレンチの状況から玄室壁石下のみに掘られていたことが確認された。

d) 遺物

玄室内からは、中央部を除き床面付近において、耳環玉類等が検出された。玉類は出土位置不明のものも含め9点存在する。1・2の勾玉はそれぞれ瑪瑙製と水晶製で、重量は3g・6gを測る。3・4は水晶製の切子玉で4はやや型が崩れている。それぞれ3.5gと2gを測る。5は水晶製の小粒の算盤玉で1g。6～8は丸玉

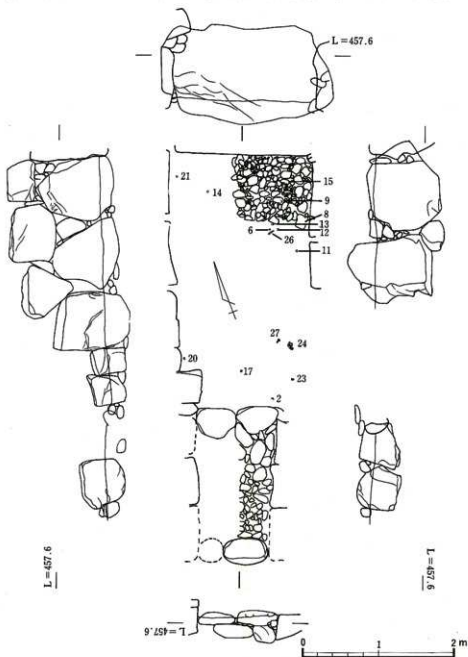


- 1 表土 灰褐色土。
 I 暗褐色土
 2 暗褐色土 酸化土。
 3 暗褐色土 FP 多く含む。
 4 灰褐色土 砂質、浅間珪石。
 5 黒褐色土 FP・円礫多く含む。
- I 黒褐色土 FP 多量に含む。
 II FP 砂質層
 III FP 層
 IV 黒褐色土

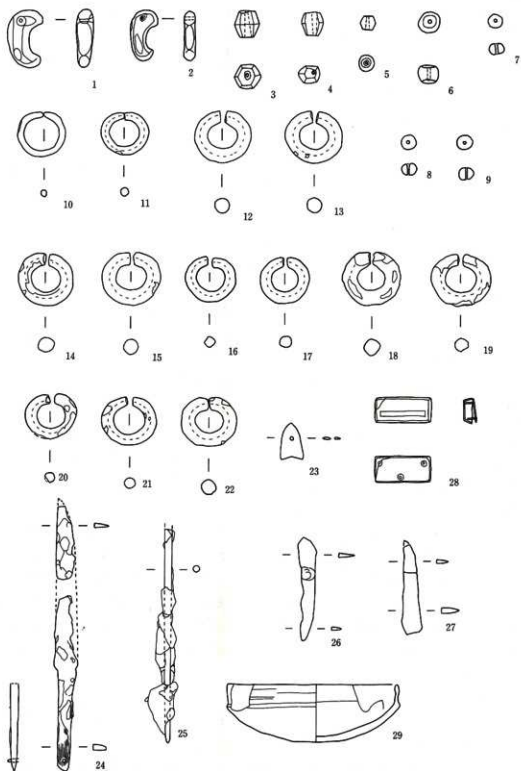


第7図 11号墳実測図

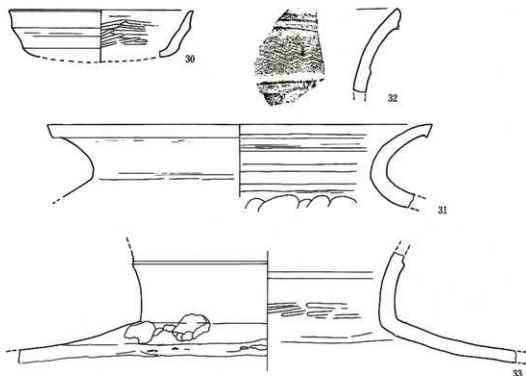
である。6は緑色珪質頁岩製で穿孔面が窪んでいる。他は土製である。重量は6が2g、他はいずれも0.4gである。耳環(10~22)は計13点検出された。地金はすべて青銅製であるが、いずれも緑青が吹き表面の遺存状況は不良であったが、14と17については鍍金の一部が残存する。重量は10~22までそれぞれ3.5g・5.5g・24g・24g・24g・24.5g・12g・10g・19.5g・24g・12g・13g・20gを測る。23は狭根で無茎の鉄鏃で中心部に有孔、浅い腸扶を有する。24は刀子である。特に刃部



第8図 11号墳石室実測図



第9図 11号墳出土遺物(1)



第10図 11号墳出土遺物(2)

遺存状況は不良で、中央部と切先を欠損する。基には部分的に木質部が残り、先端側に目釘が一部認められる。25は棒状の鉄製品で銹等の付着物が多量に付くため、その部分の形態は不明確であるが、断面円形を呈し、一端は尖るが片側は欠損しており不明。26と27は刀子の破片である。28は北側周堀の浅間B軽石層中から検出された青銅製の巡方で裏側から3ヶ所で鋳留めされている。留金の周りには、わずかに鍍金が認められる。

土器類はすべて石室外からの出土である。29と30は石室入口前で検出された土師器の坏で、29は口縁部を一部欠損するが、口径14cm、高さ4.7cmを測る。丸底ぎみの胴部を有し、稜から上の口縁部は直立する。30は口縁から胴部にかけての破片である。胴の浅く口縁部が長く外反する器形で、口縁部と胴部の境の他に口縁中ほどにゆるい稜を有する。31～33は須恵器甕の破片である。31はくの字に短く外反する無文の口縁部。32は口縁部破片で稜線区画内に波状文を施す。33は頸部付近の破片で自然釉がかかる。口縁はやや外反しながら立ち上がり、稜線区画が認められる。

12号墳

a) 位置

第2次調査区中央寄りに位置する。約10m 南に10号墳が、約15m 東に11号墳が存在する。

b) 墳丘及び外部施設

高さ25m、長径8.7mの、塚状を呈し礫が投げ寄せられていた。周囲の表土を剥だところ、すでに大半は水田構築時に削平されていたが、北側の一部については墳丘根石の列石が検出され、直

径10.7mの円墳であることが判明した。またトレンチの土層の状況から墳丘はFP層上に構築されていることが確認された。

墳丘根石は他の古墳と異なり50cm大の割石が使用されている。

周堀は全掘でできなかったが他の古墳と同様、入口側を畝状に残し、古墳を囲繞している。規模は西側で幅7m、深さ約0.8m、北側トレンチで幅8m、深さ0.8mを測る。周堀の中からは多量の河原石が検出されたことから他の古墳と同様数段以上葺石が存在していたことが窺える。また葺石根石の外縁には他の古墳と同様テラス面が存在が確認された。

c) 主体部

発掘調査を実施した当古墳群の古墳の内、主体部については最も残存状況の良い古墳であった。石室は全長503cmを測る自然石乱石積横穴式両袖型石室でS-30°-Wに開口する。天井石は玄室上に2枚現存し、偏平な用石が懸架されている。奥壁側の石は215cm×130cmを測る。

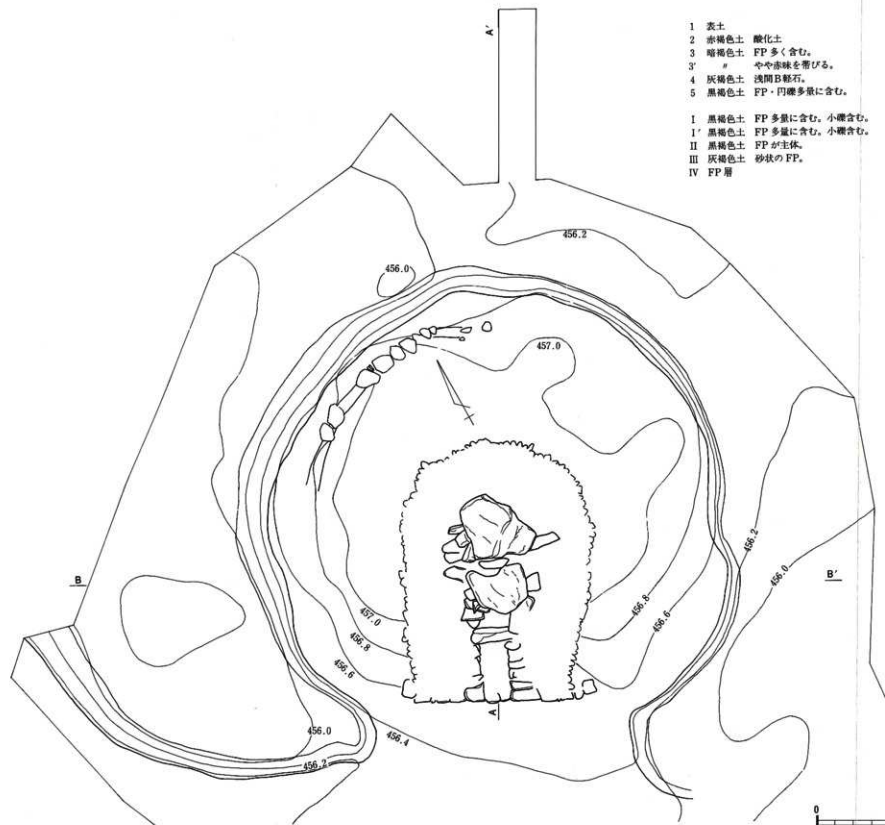
玄室壁石は、奥壁については横長の大石を3段積にしている。各段とも石の座りを良くするため、まず横長の割石を据えその上に大石を乗せており、これは天井石の懸かる最上段にも施されている。側石は左右で若干異なるが、1段目は大振な割石が3石横積み、あるいは平積みになれ、羨道側の用石は両者とも内湾したものが使用されている。2段目以降は小振りの割石が用いられ、平積みあるいは小口積みとされている。床面からの高さは奥壁側で158cmを測る。

羨道側壁は1段目は右側で4石、左側で3石構成で2段目以降は玄室同様に小振な石が使用されている。また、玄室側には4段目に大振りの礫石が懸架されていた。玄室床面の平面形は胴張り状を呈する。床面には玉砂利が存在し、その上に偏平な礫石が敷設されていた。羨道部は入口と玄室側に河原石を4段小口積に積み上げ区画し、その中に小礫を充填し、閉塞としていた。裏込めについては他の古墳と同様に石室を包み込むように馬蹄形を呈し、外縁は河原石を小口積みにし、壁石との間には小礫・土砂を充填していた。

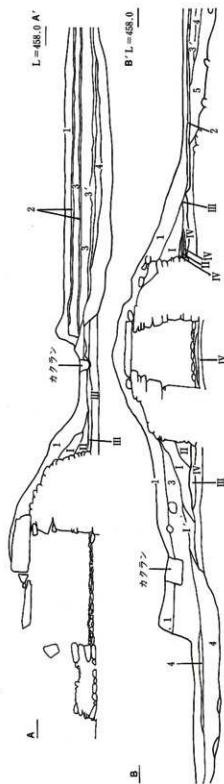
d) 遺物

玄室中央から奥壁寄りにかけて耳環類が、左壁寄りに鉄鏃類が検出された。また奥壁寄りには粉化した骨が認められた。

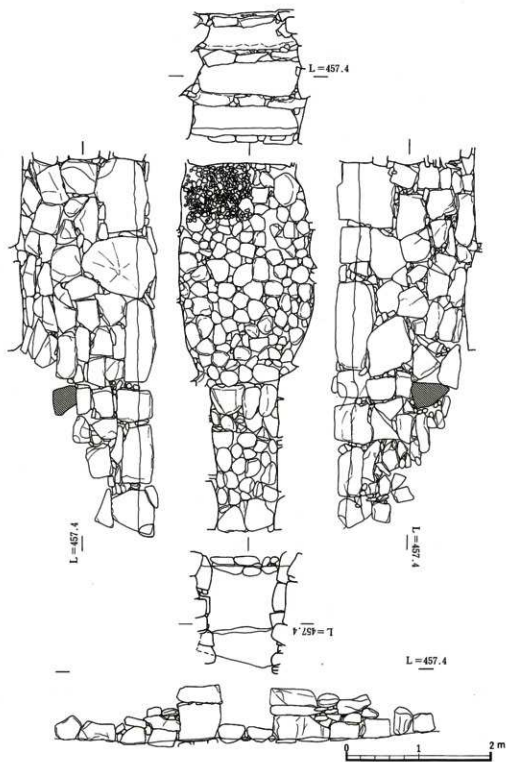
1・2は滑石製の玉で、管玉を輪切にしたような形を呈する。それぞれ2gを測る。耳環は12点検出された。3～12は青銅製で緑青が吹くが7と8には鍍金の一部が残存する。13と14は鉄製で錆化が著しい。重量は3～14まで、28g・28g・27g・23g・27g・29g・33g・32g・31g・19.5g・22g・13gを測る。刀子は4点検出された。15は全長25.4cmで2つに折れている。両関で茎には上部に鐙が、下部には目釘が残る。16は刃部下端から茎にかけての残欠で両関。鐙の一部と目釘穴が残る。17は全長16cmを測る片関の刀子で刃部を欠損する。18・19とも刃部下端から茎にかけての残欠で、前者には鐙の一部と下端に目釘穴が認められた。鉄鏃は残欠まで含め14点を図示した。20～27までは棘莖被を有する有茎鏃で片小爪片状鏃箭式の同一形態である。重量は完形品で15gを測る。30は片切刃箭式、31は両関の鏃箭式である。28・29・32・33は先端部やその他を欠損



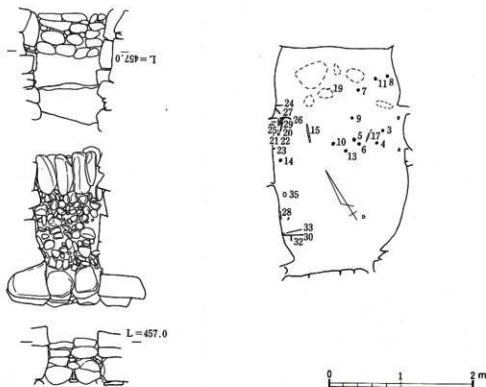
- | | | |
|-----|------|----------------|
| 1 | 表土 | |
| 2 | 赤褐色土 | 酸化土 |
| 3 | 暗褐色土 | FP 多く含む。 |
| 3' | # | やや赤味を帯びる。 |
| 4 | 灰褐色土 | 浅間B軽石。 |
| 5 | 黒褐色土 | FP・円礫多量に含む。 |
| | | |
| I | 黒褐色土 | FP 多量に含む。小礫含む。 |
| I' | 黒褐色土 | FP 少量に含む。小礫含む。 |
| II | 黒褐色土 | FP が主体。 |
| III | 灰褐色土 | 砂状の FP。 |
| IV | FP 層 | |



第11図 12号墳実測図



第12図 12号墳石室実測図



第13図 12号墳閉塞状況及び遺物出土図

するため、詳細は不明であるが前記のいずれかに属すると思われる。34・35は、くの字に外反する甕の口縁部で、前者は須恵器で口唇部はやや肥厚する。後者は土師器でいずれも無文である。

13号墳

a) 位置

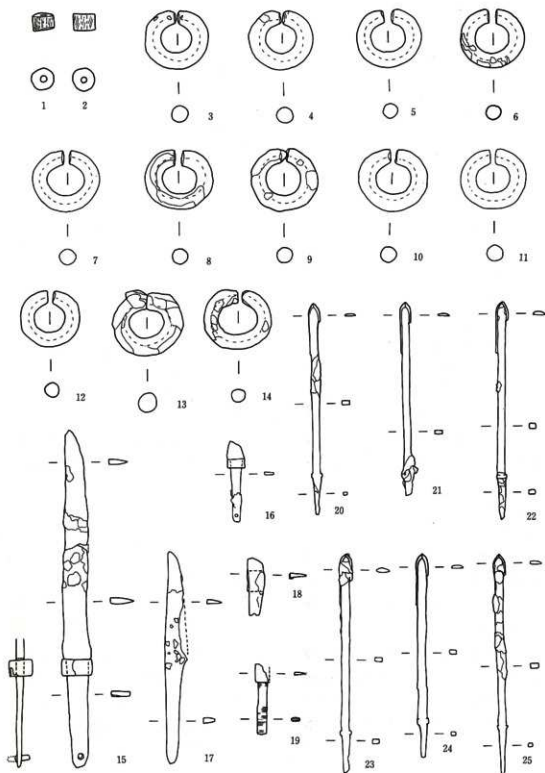
第2次調査区の北端に位置し、本体は道路下になっている。

b) 墳丘及び外部施設

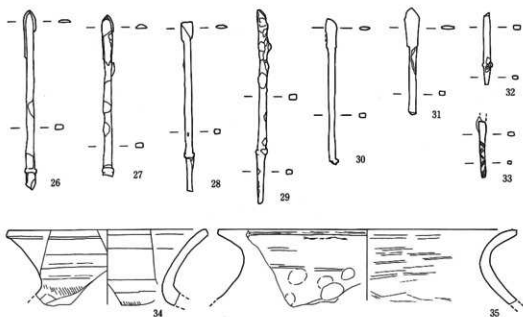
すでに大半が道路下になり東側部分も削平されているため不明である。

c) 主体部

地元の人によれば、道路工事前は石室に天井石が架かった状態であったとのことで、石室の一部の残存が想定されたため、市道の東側部分を発掘調査した。しかし、石室の大部分が道路下になったと思われ壁石は抜き取られた天井石と側石の一部を確認したにとどまった。天井石は2.48m×1.92mで厚さは27cmを測る。原位置で検出できたのは石室裏込根石の一部のみで、河原石がFPの軽石層上に据えられていた。



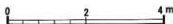
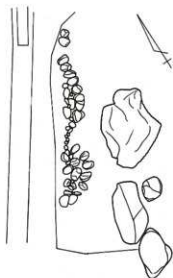
第14图 12号填出土遺物(1)



第14図 12号墳出土遺物(2)

他の時代の遺物

石器が4点、古銭が2点存在する。1は変質玄武岩製の磨製石斧で、基部を欠損する。重量は385gを測る。2は撥形の打製石斧である。黒色頁岩製で重量は105gを測る。3は粗粒安山岩製の石皿の破片で使用面が大きく窪む。重量は、2.6kgを測る。4は粗粒安山岩製の大型の凹石で一面に3点、他面に1点の凹を有する。重量7kg。5・6は宋銭で、前者は紹聖元宝、後者は元豊通宝である。初鑄はそれぞれ1094年と1078年である。



第15図 13号墳

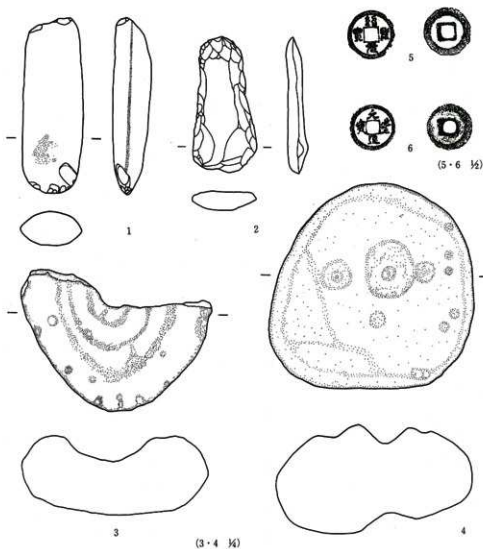
IV まとめ

・古墳の築造企画と使用尺度について

2ヶ年にわたる発掘調査により検出した古墳のうち、墳丘規模及び石室の状況等について確認できた9基の古墳の築造企画と使用尺度について考えてみたい。

横穴式石室の構築には一尺が24cm近似的の晋尺、35cm近似的の高麗尺、30cm近似的の唐尺が使用されたとされている。ここでは、6世紀末頃から県内の古墳に使用されはじめたとされる高麗尺について、各古墳の築造企画と整合が認められるか検討を試みた。

まず石室平面企画については、35cmの方眼を作成し、石室平



第16図 他の時代の出土遺物

面形と高麗尺との整合性の有無を確認する作業を行った。なお、墳丘の設計企画については、尋（5尺）の単位が使用されたと推定されていることから、古墳の直径は尋に読み替を行い、石室中心線上に中心点を置いた円（単位は尋）との整合性があるか否かを確認した。

結果は表1の通りである。

各古墳とも実測数値上では必ずしも高麗尺と整合せず、完尺数値とのずれが生じる部分も認められたが、35cmの方眼図を石室平面図と重ね合わせ総合的に判断すると表の完尺数値が導き出され、設計企画上高麗尺が使用されたことが判明した。また、墳丘規模（径）に関しても多少のずれは生じるものの整合性が認められ、企画上尋の単位が用いられたと考えて大過ないであろう。

・秋塚古墳群の年代について

古墳の年代を探る上で、その判定材料となる事項について挙げてみると、

表 1 各古墳の復元尺

	1号墳	2号墳	3号墳	4号墳	5号墳	6号墳	10号墳	11号墳	12号墳
石室全長	14尺	15尺	—	15尺	12尺	—	11尺	15尺	14尺
玄室長	7尺	8尺	—	8尺	6.5尺	6尺	6.5尺	8尺	8.5尺
玄室奥幅	5尺	5尺	3尺	5尺	3尺	3尺	4尺	5尺	4尺
羨道長	7尺	7尺	—	7尺	5.5尺	—	4.5尺	7尺	5.5尺
羨道奥幅	3尺	3尺	—	3尺	2尺	—	—	3尺	2.5尺
古墳直径	6尋	6尋	—	6尋	5尋	5尋	5尋	6尋	6尋

①古墳はすべてFP（二ツ岳降下軽石堆積物）の降下後構築されている。

②埴輪はいずれの古墳からも検出されなかった。

③立石状の羨門（2・4・5号墳）や支門（6号墳）が認められた。

④土器の出土量が少く、時期を判断できる資料も少ないが、7世紀前半以降の所産考えられる。

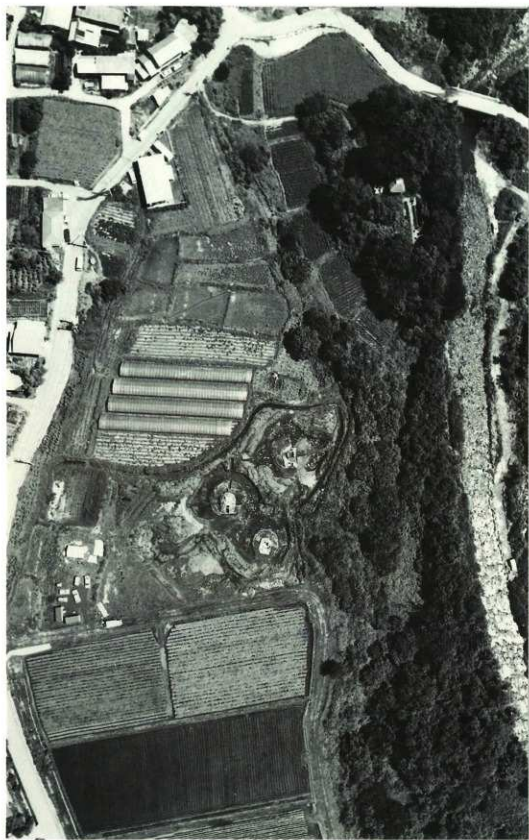
以上のことから秋塚古墳群は、7世紀前半以降に形成されたと位置づけておきたい。

表 2 古墳計測表

No	線覧	墳形	径(m)	石		室 (cm)								
				型 式	開口方向	全長	玄室長		玄室幅		羨道長		羨道幅	
10	漏	円墳	8.0	横穴式 (両袖型)	S-44°-W	385	左	—	奥	133	左	—	奥	—
							中	236	中	—	中	154	中	88
							右	—	前	—	右	—	前	—
11	漏	円墳	10.6	横穴式 (両袖型)	S-21°-W	532	左	283	奥	188	左	—	奥	—
							中	—	中	176	中	—	中	96
							右	—	前	—	右	—	前	—
12	漏	円墳	10.7	横穴式 両袖型	S-30°-W	503	左	301	奥	151	左	195	奥	93
							中	298	中	184	中	205	中	85
							右	290	前	133	右	207	前	80
13	漏	—	—	(横穴式)	—	—	左	—	奥	—	左	—	奥	—
							中	—	中	—	中	—	中	—
							右	—	前	—	右	—	前	—

写 真 图 版





調査区域全景



10～12号墳全景

10号古墳



調査前の状況



周堀内葺石崩落状況



壁石と遺物出土状況

古墳全景



古墳全景



11号古墳



調査前の状況



遺物出土状況



石室全景



奥壁の状況

左壁の状況



右壁の状況



古墳全景



12号古墳



調査前の状況



裏込と墳丘断面の状況



裏込の状況

閉塞の状況
(玄室から)



閉塞の状況



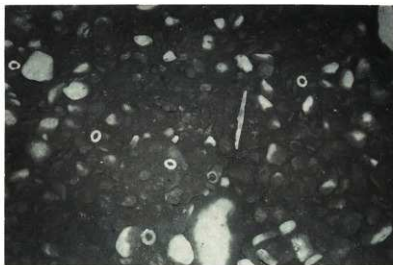
羨道床面の状況



床面の状況



遺物出土状況



礎石の状況





奥壁の状況

左壁の状況



右壁の状況



古墳全景



13号古墳



調査前の状況



裏込根石の状況



10号墳 1



10号墳 2



11号墳 6



5



3



4



7



8



9

11号墳



10



11



17



16



20



21



14



13



12



15



18



19



11号墳 22



11号墳 23



11号墳 28



11号墳 27



11号墳 26



11号墳24



11号墳30



11号墳25



11号墳32



11号墳29



11号墳31



11号墳33

12号墳



12号墳 1



12号墳 2



10



8



11



7



5



6



3



4



9



12



13



14

12号墳



15



17



24



20



25



22



23



16



26



21



27



30



28



29



18



17



31



32



33



34



他 3



35



他 5



他 6



他 2



他 1



他 4

発行 平成4年3月27日

編集・発行 沼田市教育委員会
沼田市西倉内町780
TEL (0278) 23-2111

印刷 有限会社コトブキ印刷
沼田市長沼須町659-2
TEL (0278) 22-5400

